

関連学会印象記

第21回日本集中治療医学会総会印象記

公文啓二

第21回日本集中治療医学会総会は平成6年2月24～26日、名古屋市立大学麻酔・蘇生学教室勝屋弘忠会長により「集中治療の新しい展望を拓く」と「新しいチーム医療」という2つのメインテーマのもとに名古屋国際会議場で開催された。

医師部門では4つの特別講演、4つのシンポジウム、2つのパネルディスカッション、7つの教育講演が生まれ、また看護部門でも特別講演1、シンポジウム4、教育講演2、ミニシンポジウムが行われ、一般演題は医師部門374題、看護部門117題で2000名前後の参加者を得て盛況であった。

2月24日の8時50分から勝屋会長の挨拶の後、8つの会場に別れシンポジウム、教育講演、口演発表が開始された。本学会にはさらに4つのランチョンセミナー、4つのサテライトシンポジウムが組み込まれ、全身管理を行う集中治療の学会として多岐にわたるテーマについて議論がなされた。

シンポジウムの一つに、「集中治療と医療経済」および看護シンポジウムに「ICUにおける看護の経済性」が生まれ、経済学者および厚生省からの演題を得て、限られた資源の中での有効利用の観点から集中治療の医療経済について議論され、種々の問題点が提起され、今後集中治療の医療経済をどのように評価するのか、多くの宿題が残された。

2日目には、「高齢者集中治療」のシンポジウムがあり、筆者もシンポジストの一人として発表させていただいたが、特に高齢者の集中治療に際して生じる医療経済、社会的および倫理的な諸問題について討論されるとともに、循環系疾患を中心とした高齢者集中治療の成績・問題などが提示された。治療成績に関しては、年齢に比しその成

績は良好であることが印象的であった。今後、高齢者社会がさらに進む現況において、今後高齢者の集中治療は不可避かつ大きなテーマであり、時を得たシンポジウムであった。

さらに、2日目にはAPACHEスコアリングシステム考案者のKnaus教授の講演があり、筆者自身はシンポジウムの最中で拝聴できず残念であったが、集中治療における重症度評価・予後予測の意義や利用法に関する内容であったとのことで、我が国で立ち遅れているかかる評価法を推進し、集中治療の医療経済や予後判定を確立していく過程において意義深いものであったと思われる。

また、欧州集中治療医学会会長であるベルギーのVincent教授の特別講演「Intensive care medicine in Europe; history, current status and future view」を拝聴したが、集中治療領域で今我が国でも話題となっている酸素需要供給バランスの問題、SIRSとしてsepsisとMOFに関すること、sepsisにおけるNOの役割、院内感染の問題、SDDなどの医学的なトピックスのエッセンスについて講演されるとともに、集中治療の場での治療中止あるいは死に関する倫理的問題に関する欧州の実態や、欧州の集中治療専門医制度などについてもふれられ、有意義な講演内容であった。

本学会で最も興味をもたれたのは、NO吸入に関する話題で、2日目の17:00～18:00のNO吸入の話題が集められた第3会場は収容しきれない程の人が参集し、筆者自身も1演題を報告させていただいたが、極めて熱気に満ちた討論がなされた。また翌日のシンポジウム「NOと肺」の聴衆も広い会場の大半がうまっている盛況であった。NO吸入療法は、未だ試行錯誤の段階であるが、肺高血圧症、Fontan circulationの維持、吸呼不全の治療などに効果が期待できる方法であるが、

投与方法や安全性などの課題が残されており、今後のさらなる研究の進展が待たれ、次回にも是非取り上げる必要性のあるテーマだと思われた。

その他、シンポジウム、パネルディスカッション、教育講演、特別講演、など時を得た意義深い内容のものが数多く、各分野の方々に大変好評で

あったようであるが、スケジュールが少しくつく、拝聴したい特別講演を一部拝聴できなかったのは残念であった。日本医学会への加盟を念願としている本学会はより大きな学会へと発展を続けているが、そろそろ一般演題を selection する時期にさしかかっているのではないかとも思われる。